

中国遼寧省出身 時光とき ひかるです（本名）。

十数年前、私費留学生として来日、大学卒業後、地域国際化協会にて3年間勤務。ボランティア日本語教室、外国人住民支援などの事業に携わり、はじめて外国人住民の現状を知ると同時に、地域のことに関心・意識を持ちはじめました。現在JIAMで研修講師、研修担当をしながら、多文化共生コーディネーターとして日々奮闘中です。

このコーナーでは、私の目を通して、「日本の地域社会、外国人住民の今」をご紹介します。皆様のまわりに多文化共生の現場があれば、ぜひ教えてもらい、いろいろ勉強させていただきたいと思います。日本全国、どこまでも飛んでいきます。



皆様からのご意見、ご感想、現場情報など楽しみにお待ちしております。

TEL : 077-578-5932 メール : h-toki@jiam.jp

【国境を越えた人々、国境を越えたふるさと】

～中国で出会った元技能実習生たち～

全国市町村国際文化研修所教務部
多文化共生コーディネーター 時光

元技能実習生に会うために中国へ

外国人技能実習生^{*1}について、あなたはどんなイメージを持っているだろうか。

どこか日本人と違う雰囲気の若者たちが自転車でスーパーに向かう場面や、あるいは一時間300円ほどの安い賃金で深夜まで残業を続けるようなことを思い浮かべるのであろうか。

言葉の通じない日本で長い間、研修、実習とは名ばかりの長時間労働に従事し、苦労を重ねた外国人技能実習生は帰国後、どのような生活を送っているだろうか、そして日本で学んだ技術や貯めた資金等を母国ではどのように生かしているのか、これらの疑問を持って私は中国へ旅立った。

今号では、中国現地調査で出会った元技能実習生の現状についてレポートしたい。

私は地域国際化協会及びJIAMの業務を通して、日本の各地域においてたくさんの中国人技能実習生と出会った。その多くは、中国国内のエリートではない、いわゆる農村地域出身の若者である。その大多数が、言葉も通じないこの日本という異国で、かなり厳しい労働環境の中、長時間労働と自由のない生活を

強いられていた。自分は彼らと年齢がほとんど変わらないためなのか、同じ中国人として技能実習生に出会うたび、胸を痛め、この制度を憎まずにはいられなかった。若者の自由と青春を奪うこの外国人技能実習制度はいつ廃止されるのかと考えていた（国際連合人権理事会や日本国内の多くの弁護士会からも「廃止されるべきだ」と指摘されている）。この制度を通じて、中国ではどのようにして、技能実習生を募集しているのか、また来日前の日本語教育や派遣先の事前説明はどうになっているのか、さらには来日後のアフターケアはどうになっているのか、今回は（財）国際研修協力機構（JITCO）の協力を得て、中国大連市にて調査した。

中国で出会った元技能実習生の今

中国対外友好合作服務中心大連事業部（以降「大連事業部」という）は大連市内の中心部にあり、中国国家專家局認定送り出し機関に所属する一つの部署^{*2}である。今回は大連事業部のご協力のもと、元技能実習生3人にお会いでき、直接お話を伺える貴重な機会に恵

まれた。

面談室に入ると3人が既にそこで私たちを待っていた。日本から突然やってきた私たちを不審に感じたのか、緊張感が部屋中に漂っていた。私は中国語で今回のヒアリング調査の目的を丁寧に伝え、挨拶がてら声をかけてみた。すると向こうも少し肩の力が抜け、徐々に会話ができる雰囲気になってきた。目の前に座っているZ氏(男性)、S氏(女性)とL氏(女性)は、いずれも20代後半から30代前半

だと思われる。先まで顔が強ばっていた彼らは、私の中国語を聞き、少し安心したのか、椅子の奥の方へ座り直し、徐々に視線を合わせてきた。

彼らはもともと大連市内の工場で機械、クリーニング、縫製関係の仕事に従事し、大連事業部を通じて1999年から2008年にかけて、それぞれ日本へ技能実習生として派遣され、長野、東京、長崎の同業者の工場で働いていたという。渡日前、大連市内にある学習センターで、先輩の技能実習生から数か月間、日本語や日本での生活のことなどを教わった。使っていた教材は中国で人気ナンバーワンの『中日交流標準日本語』(中国人民教育出版社)ではなく、大連事業部が独自に開発したものである。その教材のおかげで、実習分野に応じて、より現場で役立つ実践的な日本語を学習できた。また日常会話については、当初はかなり大きな壁があったものの、日々日本人職員との会話の中で頑張っただけで覚えたという。

ところで送り出し機関といえば、多くの場合は、大連事業部のような中国認定の機関ではなく、非正規のところを想像するだろう。その多くは高い保証金や手数料を取り、都合のいい情報を無責任に伝えるといったイメージが強い。手数料や事前説明などといったこ



中国対外友好合作服務中心大連事業部が思いを込めて開発した教材

とはデリケートな話題とはいえ、私はやはり触れずにはいられなかった。3人の話によれば、大連事業部はいっさい仲介手数料を取らず、合法的に実習生を送っているようだ。さらに渡日後においても労働や生活などあらゆる面においてサポートし、必要な場合は、大連事業部の職員が日本の現場に向かうこともしばしばあるという。

大連事業部のバックアップのもと、技能実習生たちは日本の労働組合や実習現場の会社との間で、ほぼ大きなトラブルはなく、良好な関係を保ちながら実習生活を送ることができたようだ。日本人社員は休みの日に実習生の寮を訪ね、一緒に日本語を勉強することもよくあったという。「思うとおりに日本語でコミュニケーションが取れなかったのは残念だったが、日本での生活は青春の輝かしい1ページになった」と3人は誇らしげに私に語った。

3人との距離が徐々に縮まり、いよいよ核心に迫りたいと考え、周囲の反応を気にしながら、「実習生活の中で、最も難しい壁、不満に思うことは何か」と尋ねた。正直、私は労働条件や待遇あるいは日本人との人間関係のような深刻な話を聞くことができると想像していたのだが、意外にも3人とも口をそろえて「日本語だけが問題だった」と異口同音に

答えた。「日本語ができれば、工場のおばさんともっといろんな話ができた。技術の勉強もさらにできたはずだ。日本の工場はきちんと労働計画に沿って働くので、中国の工場よりずいぶん楽だ。日本語さえできていれば、実習生活がもっと楽しかったらろう……」と彼らの返答は本当に意外なものだった。

続いて私は「自分の人生において、日本での実習生活をどのように位置づけているのか、日本で得た最も大きな成果は何か」と訊いてみた。するとこの質問を耳にした瞬間、彼らは生き生きとした表情に変わり、「大金を手に入れたんだ！」と3人が目を合わせながら嬉しそうに答えた。

L氏は日本から持って帰ってきた資金で借金を返済し、生活に余裕が生まれた。Z氏は日本で稼いだお金を起業の資金に充当し、現在は大連市内で友人と共同で機械関係の小さな会社を経営し、社長になっている。彼は日本人の働き方や仕事に対する責任感に感銘を受け、「将来日本式経営管理システムを自分の工場に導入したい」と目尻にしわを寄せながら嬉しそうに夢を語っていた。

3人の中で、もっとも印象的なのはなんといってもS氏だ。「日本での実習生活は私の人生をバラ色に変えてくれた。なぜ?」と思うでしょ。実は日本で稼いだお金と学んだ技術のおかげで、今は自分でクリーニング店を経営している。新築の家や高級車も手に入り、今はとても幸せだわ……」とこぼれそうな笑顔で話を聞かせてくれた。その笑顔はあまりにも輝かしいものだったので、いまだに鮮明に思い出すことができる。

私はさらに問いかけ、「もし改善してほしいことがあるとすれば、それは何か」と訊いたら、女性2人は互いの目を見て微笑みながら「もう一度日本に行けるようにしてほしい」と声を重ねて言った。口数が少ないお隣のZ氏はというと、「日本で十分満足できる収穫があったので、次は旅行者として再び日本を訪れたい」と自信あふれる表情で話した。

外国人技能実習制度に魅力を感じる若者

確かに外国人技能実習制度をめぐる課題が多いのは否定できない。しかし、一部の事例とはいえ、技能実習制度を通して幸せをつかんだ若者がいるのも事実である。一方で、元技能実習生の様々な苦勞に気がつかず、光の部分に目を奪われる中国人の若者も少なくない。どのような若者が外国人技能実習制度に魅力を感じているのか、中国社会の実状を交えながら考えたい。

学歴が低く、農村地域出身で低収入もしくは無職で現状に満足していない若者ほど外国人技能実習制度に魅力を感じる傾向があると私は思う。日々大きく変化する中国ではますます生活水準が高くなっているというが、今回中国に行って、現実にはまさにそのとおりだと実感した。しかし、市民生活レベルのボトムアップが緩やかに進んでいるとはいえ、学歴が低い中国の農村地域出身の多くの若者にとっては、その水準に到達できる給与がもらえるような職業に就けないのが現実だ。技能実習生として日本で3年間努力すれば、今回の3人のケースで言えば、300万円程度の貯金を持って帰国できたということであった。このような若者にとっては、日本円の「300万」はかなりの大金である。リスクは伴うものの日本側の募集条件をクリアできれば、彼らにとって技能実習生として日本に行くことは稼ぎがよく、そのうえ日本の技術も学べるので、魅力を感じるだろう。S氏の言葉を借りると、「外国人実習技能制度は中学校すら卒業できていない私の人生をバラ色に変えてくれた、ありがたいビッグチャンスだ」ということなのだ。

沿岸部をはじめ、中国都市部において生活レベルがどんどん上がり、海外に出なくても良い生活ができる中国人もいるのは事実である。しかし、学歴が低く、職業になかなか就けない多くの中国農村部出身の若者にとっては、そうなりたいという憧れはあるものの、現実の中国には「見えない壁」があり、事実上不可能だといっても過言ではない。この事



元技能実習生や送り出し機関関係者の皆さん（右から4番目が著者）

実を注視すればまだまだ技能実習生のニーズがあるのではないかと思われる。

元技能実習生の彼らはどうして成功したか

今回大連で出会った3人は、技能実習生制度で今の幸せをつかんだ数少ない事例である。外国人技能実習制度への批判が絶えない中、この3人が成功を手に入れたのは、ただの偶然なのだろうか。

もちろん、大連事業部のような派遣機関との出会いや日本側の様々な関係者の協力なくしては語れない。個人レベルで成功の要因を考えれば、まず辛抱強さが成功へと導く不可欠な気質だと私は思う。彼らは大きなトラブルがなかったとはいえ、言葉の通じない環境で働くというのは決して簡単なことではない。日本人とのやり取りや働くことに対する意識の違いなど、きっと至るところで戸惑いを感じ、多くの試練に直面したに違いない。3年間絶えず努力を重ねてきたからこそ、今は幸せそうにほほ笑んでいられるのではないか。

もう一つ言えることがあるとすれば、目的を持って日本に行くことが技能実習生の成功につながるポイントだと思う。その目的は日本語レベルや技能を高めることでもいいし、

資金を貯めること、あるいは若いときに自分への試練を与えることでも構わない。目的をきちんと持っていれば、壁に直面したとき、方向を見失うことなく、自分自身の人生にとってプラスになる実習生活を送れる。大連事業部の話によれば、一部の技能実習生は親元から離れ、やっと自由になれたことで目的を見失ってしまい、順調に実習生活を終わられなかったこともあるという。

終わりに

今回の中国現地調査で出会った3人の元技能実習生は数少ない一部の成功事例なのか。技能実習制度に関する議論がなされ、批判の声が絶えない中、私自身は日本と中国という二つのふるさとを持つ在住中国人として、今後の動向を注目していきたい。

いつか国籍や文化などの「ちがいを」乗り越え、すべての「ひと」が幸せに暮らせる社会を実現できる日まで……。

- * 1 外国人技能実習制度については、(財)国際研修協力機構(JITCO)のホームページ(http://www.jitco.or.jp/system/seido_enkakuhaikai.html)参照のこと。
- * 2 中国国家外国専門家局認定送り出し機関は8つある(2011年9月1日現在)。詳しくは(財)国際研修協力機構(JITCO)のホームページ(http://www.jitco.or.jp/send/situation/china/sending_organizations.html)参照のこと。